

戦後80年「戦争・平和」特集

米川千嘉子 選

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

ノモンハンや南方にゆきし亡父。黙し小指欠きしを通夜で知りたり 幸手市 中村 早苗

△評▽戦地での傷を徹底的に隠し、経歴を語らなかった父。生還した人、しなかった人が語れなかった膨大な記憶がある。

母から姉へ戦死の兄の古手紙 回りにてきたりおとんぼの吾に 伊丹市 高村恵知子

△評▽今度は兄の手紙を作者が保管する。

「おとんぼ(末っ子)」の一語が優しい。

「腹に子がいるから安心」と言い残し征きたる父は玉砕したり 福知山市 阪梨 義春

争いが終われば次は争いを忘れるための苦悩が続く 福岡市 西田 浩之

常会どつしやんが話してた穴を掘らせてその穴へ埋めたと 生駒市 奥田 充子

嫁入りに持ち来し短刀縮緬の袋を解かず供出せし母 水戸市 吉川久美子

葉莢を古鉄屋で売り糧に 話すおばあの瞳に宿る地球 那覇市 唐草もみじ

復員の父の背中に飛びついたあの日の吾も八十路過ぎたり 東大阪市 池中 健一

打ち寄せる波に指先で触れれば祖父の眠る海底の気配 四万十市 佐竹 紫円

語り部が眼を閉じてゆつくりとあの日の朝をつむぐ言葉 佐倉市 菅原 武

老兵はたたかい疲れ、砂の海にふかく沈んでいった 月夜だ 雲南市 熱田 俊月

△評▽老兵は死なず(マッカーサー)ではない。近未来むしる老兵が戦い抜いて朽ちてゆく。「月の砂漠」を想起させる。

戦争の話はいつも尻切れでうつむいてしまう父でありました 神戸市 中林 照明

△評▽真に過酷な体験は語り尽くせないのである。うつむいた父にあわれを感じる。

街に火を放つ、人にも火を放つ、跡には椰子の木植えるのだという 東京 馬路村さほ

戦争の終わらせ方と生まれ方 子が戦地から戻ってこない 横浜市 友常 甘酢

いま一つ言い切れること、それはただ父が戦争を知っていたこと 直方市 大石 聡美

引きずるな焼き茄子みたいに死んだボクを皮がズルズル剥けてしまふよ 広島市 堀 眞希

空爆に抗う声に術もなく彼方の空に虹を見ている 茨川市 白勢 美晴

戦争のやり方進歩する毎に夏の青さは耐え難きかな 摂津市 石少山裏裏

死んでいい命なんて一つもない敵も味方も大勢死んだ 仙台市 梅津シゲル

幽霊と基地で遊んだ真夏の昔の愛をただ確かめる 奈良市 浦城 亮祐

犬も馬も鳩さきにくさに斃れゆき靖国神社に慰霊碑のたつ 東京 野上 卓

△評▽人間の戦争に利用されて死んで行った動物たち。その魂をしずめるために、私たちはいったい何が出来るだろう。

城塞のような紫陽花それぞれに窓、銃口、ゆつくりとひるがえる 加古川市 石村 まい

△評▽これは自然界の不思議な準備の風景である。あじさい族の戦いだろうか。

「なぜ戦争を止められないの」ひとりごつ妻には答へず、寡黙な神は 東京 福島 隆史

この手からこぼれ続ける平和でもあなたを救う力はあるか 亀岡市 リキザリュウ

骨と血の日本国旗を幕の内弁当という君と八月 熊本市 夏風かをる

「せんそうは しないよね?」って言う君の未来の長さを思っ黙る 松戸市 小林 里純

塞がれた防空壕の脇を抜け何も知らずに通学する子ら 横浜市 友常 甘酢

朝の卓ウクライナ産の蜂蜜とマトリョーシカを並べる明日 東京 柚月 杏子

戦後とはいままでだったかミネルヴァのフクロウは飛び立つまぐれ 町田市 古井 朔

八月の焦土の果ての悲しみの彼方の彼を還して、神さま 千葉市 星野 珠青

亡き父の語らなかった戦争の中に本当の戦争がある 春日市 伊藤 亮

△評▽戦場での過酷で非人道的な体験。語られなかった「戦争の中に本当の戦争」があるとは鋭く深い表現で考えさせられる。

読み継がねばならぬ歌がある篠弘「戦争と歌人たち」に 高松市 島田 章平

△評▽時流に迎合せず自らの良心を保った歌人を論じた篠の一冊を今こそ読めと歌う。

甘露飴をゆつくり溶かす 一瞬でからだごとけたにんげんもいる 川崎市 奥村 真帆

世界中の一万二千の原爆が性悪説を説いて回れり 筑紫野市 桂 仁徳

ワレワレと言う人達が増えてきて始まったんだ先の戦争 船橋市 藤本 典裕

パンザイと言って飛び立っただろうか伸びる飛行機雲に尋ねる 宮崎 門田 藍子

戸棚から絵本をすつと抜くやうに爆撃の夜を祖母は語りぬ 横浜市 谷口 菜月

途方もない自殺行為と評さるる祖父を奪いしレイテ海戦 フランス 小仲 翠太

胸のなか伽藍堂になる墓参り曾祖父の骨はまだ比島にあり 相模原市 榎本 ハナ

不発弾が掘り出だされる現世にて「戦争はおわっていない」と独りごつ 春日市 林田 久子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます